

梅里雪山 17人の遭難 1991年





登山隊について

名称：日中合同 梅里雪山 第2次 学術登山隊

目標：梅里雪山主峰(6,740m)の初登頂

構成：3者の合同隊 (京都大学学士山岳会、中国登山協会、雲南体育運動委員会)

参加者：全42名

- AACK - (総隊長)、隊長、秘書長、医師、隊員8名 : 計12名
- 中国側 - (総隊長、秘書長)、連絡官、隊長、隊員5名、協力員8名、運転手7名、炊事員3名、現地役人3名 : 計30名

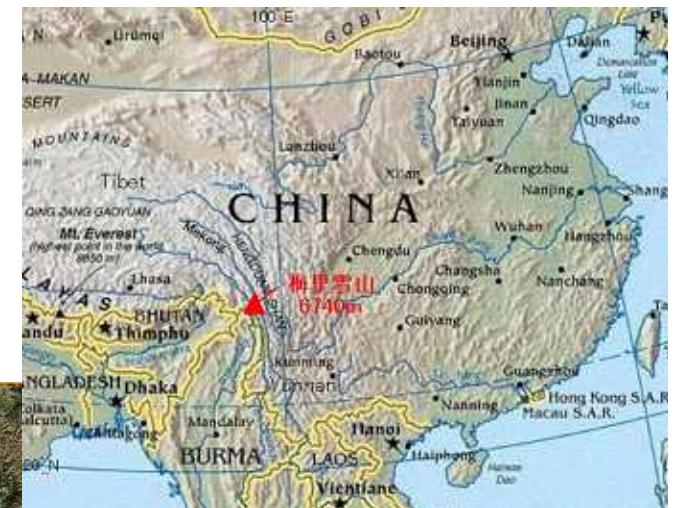
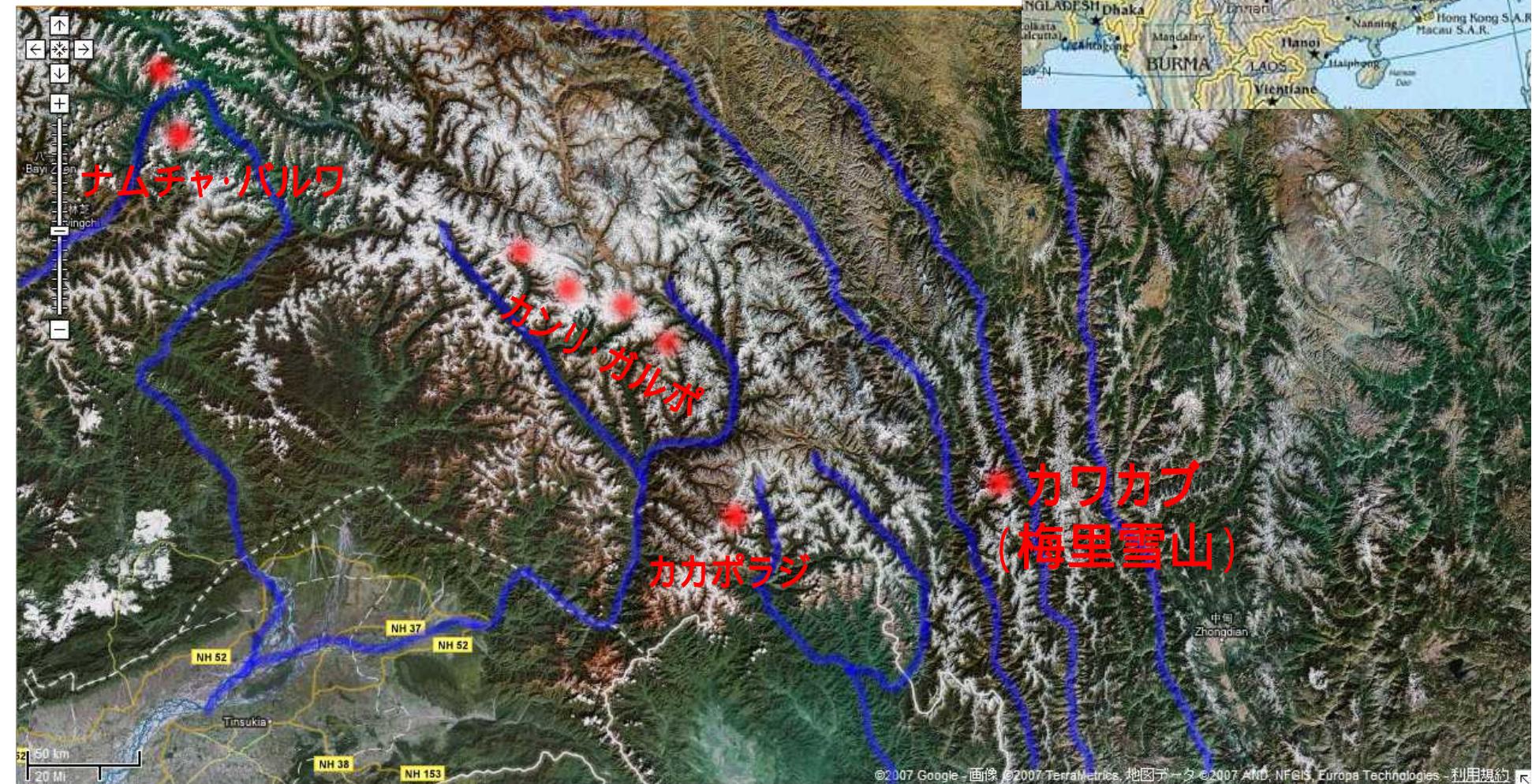
隊派遣まで：

- 1988年10月～11月 先遣隊 (日4名、中6名)
- 1989年 9月～11月 第1次登山隊(日14名、中9名)
- 1990年 2月～ 4月 偵察隊 (日4名、中10名)

遭難日：1991年1月3日夜～4日朝

遭難者数：17名 [日本人11名、中国人6名(北京2、昆明2、徳欽2)]

梅里雪山の位置



登山日程

1990 ~ 91年

1990年	11月 1日	先発隊3名発
	11月21日	本隊12名発
	12月 1日	BC建設(3,470m)
	12月 8日	C1建設(4,500m)
	12月13日	C2建設(5,300m)
	12月15日 ~ 19日	ルート伸びず(C3位置協議)
	12月20日	C3建設(5,100m)
	12月26日	C4建設(5,900m)
	12月28日	第1次アタック(5名) 6,470m到達、ビバーク寸前
	12月30日	C3へ17名集結(隊長、秘書長、医師含む)
	12月29日 ~ 31日	ルート伸びず(休養、打合せ)
1991年	1月 1日 ~	降雪、停滞
	1月 3日	積雪1.2m、22時 ~ 最終交信
	1月 4日	朝9時の交信に応答なし(17台のトランシーバー)

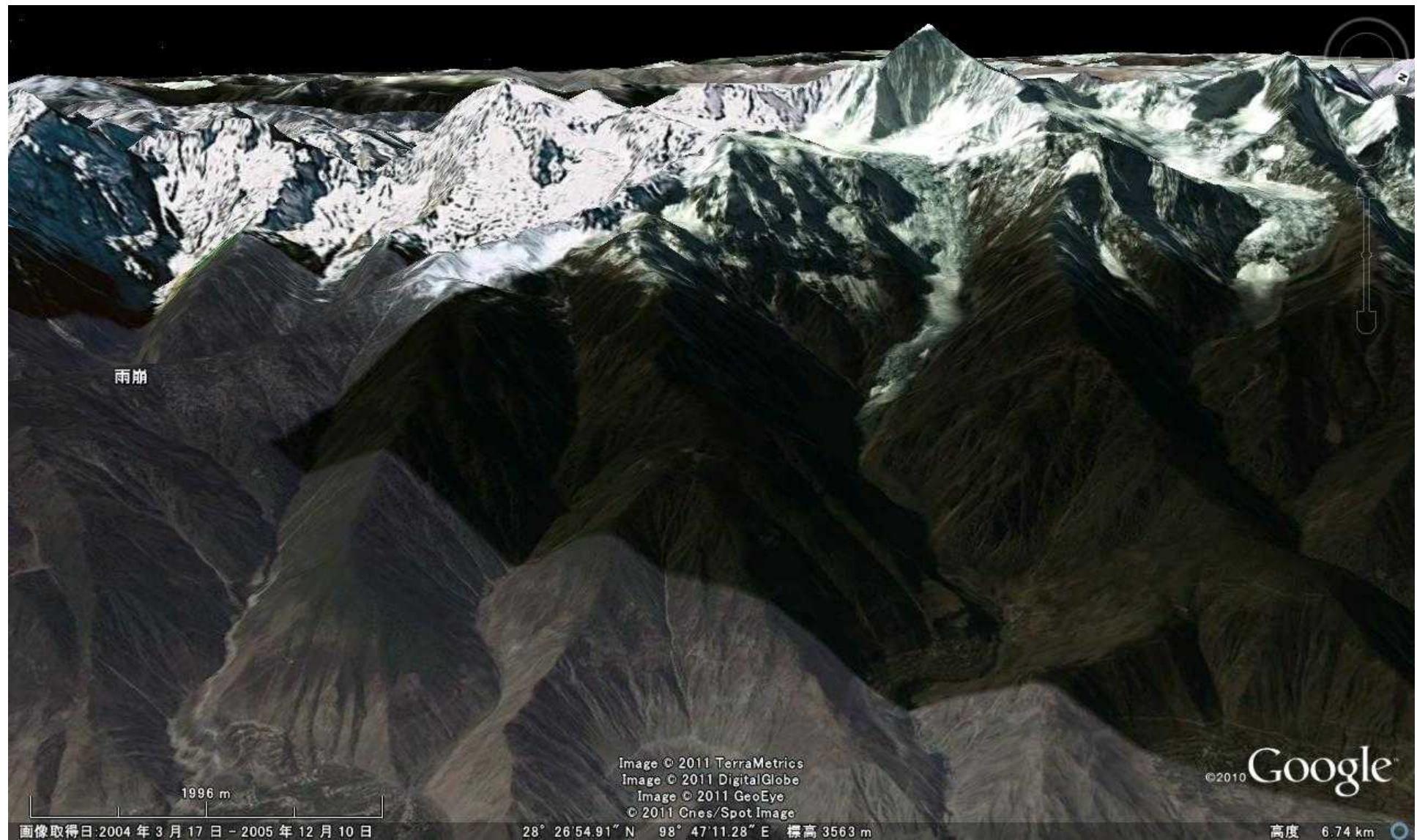
救援活動 1991年

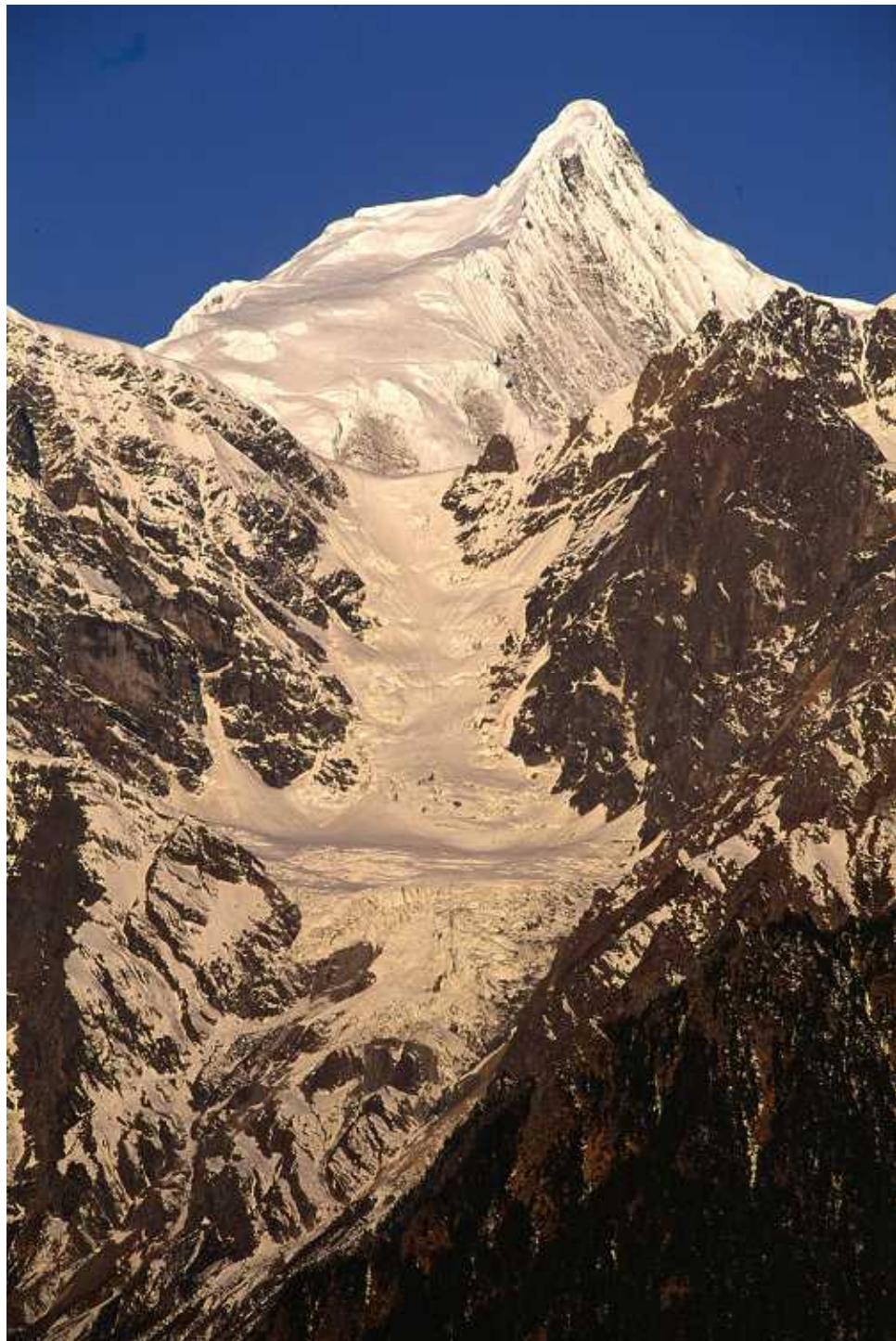
救援隊 (1991年1月)

- 1月9日 北京の救援隊4名BC着
救援活動開始
悪天が続き活動はかどらず
- 1月17日 チベットからの救援隊6名BC着
- 1月18日 C1到着(テントは1.5mの雪に埋没)
- 1月20日 C2到着(テント見つからず)、
日本からの救援隊8名BC着
連日悪天、ほとんど動けず
- 1月24日 雪の状態悪いため救援隊は
徳欽(町)へ退避
- 1月25日 救援活動の中止を決定
(理由)
航空写真にC3が写っていない
C2(1/20救援隊)と徳欽は交信可
BCと航空機は交信可

捜索調査隊 (1991年4月～5月)

- 目的: C3の発見、遭難原因の調査
- 参加者: 日中隊員とスタッフ合わせて
40名以上
- 手法: レーダー探知機、金属探知機、
GPSによる地形測量など
- 結果: **連日の悪天。**
20日間(4/26～5/15)で
上部工作できたのは2日だけ。
C1へ達することもできず、
ほとんど成果なし。





遭難原因の推定

直接原因：稜線付近からの大規模・高速な乾雪表層雪崩

間接原因：

C3の位置問題：

- ・「谷上の凹部よりはC2によったところ」？
- ・日中の合意までに時間がかかり5日間ロス (中国側は200m谷側を主張)
- ・隊員全員(隊長らも)が全員集結

合同隊ゆえの障害：

- | | |
|--------------------|------------|
| ・3者(AACK、CMA、雲南体委) | + 德欽 |
| ・言葉、コミュニケーション | ・登山未経験者の参加 |
| ・多人数登頂が宿命 | ・計画の柔軟性欠如 |

AACKの力量：

- ・登攀的な山の経験少ない、
- ・折衝、協議に忙殺(登山の検討は隊員だけ)、
- ・学術登山の弊害(登山そのものへの心のゆるみ・甘さ)

第3次登山

1996年

時期： 1996年10月30日～12月5日

参加者： 全28名

- | | |
|--|--------|
| ・AACK - 総隊長、統括隊長、秘書長、 気象 、隊長、隊員6名 | : 計11名 |
| ・中国側 - 総隊長、秘書長、隊員4名、BCスタッフ7名 | : 計13名 |
| ・ シェルパ4名 | |

第2次からの変更点：

- | | |
|--------------|-------------------|
| ・気象予報を日本でも行う | ・地元協力員ではなくシェルパを起用 |
| ・C3位置の変更 | ・LED点滅の竹竿、雪崩ビーコン |

結果：

- ・頂上稜線の6,250mまで到達
- ・**晴天続き**によるルート悪化のため断念
- ・(地元民による登山妨害多し)

その後：

- ・聖山梅里雪山の登山は**暫時禁止**
- ・1997年以後に登山活動は行われておらず、**今も未踏峰**

遺体の発見 1998年～

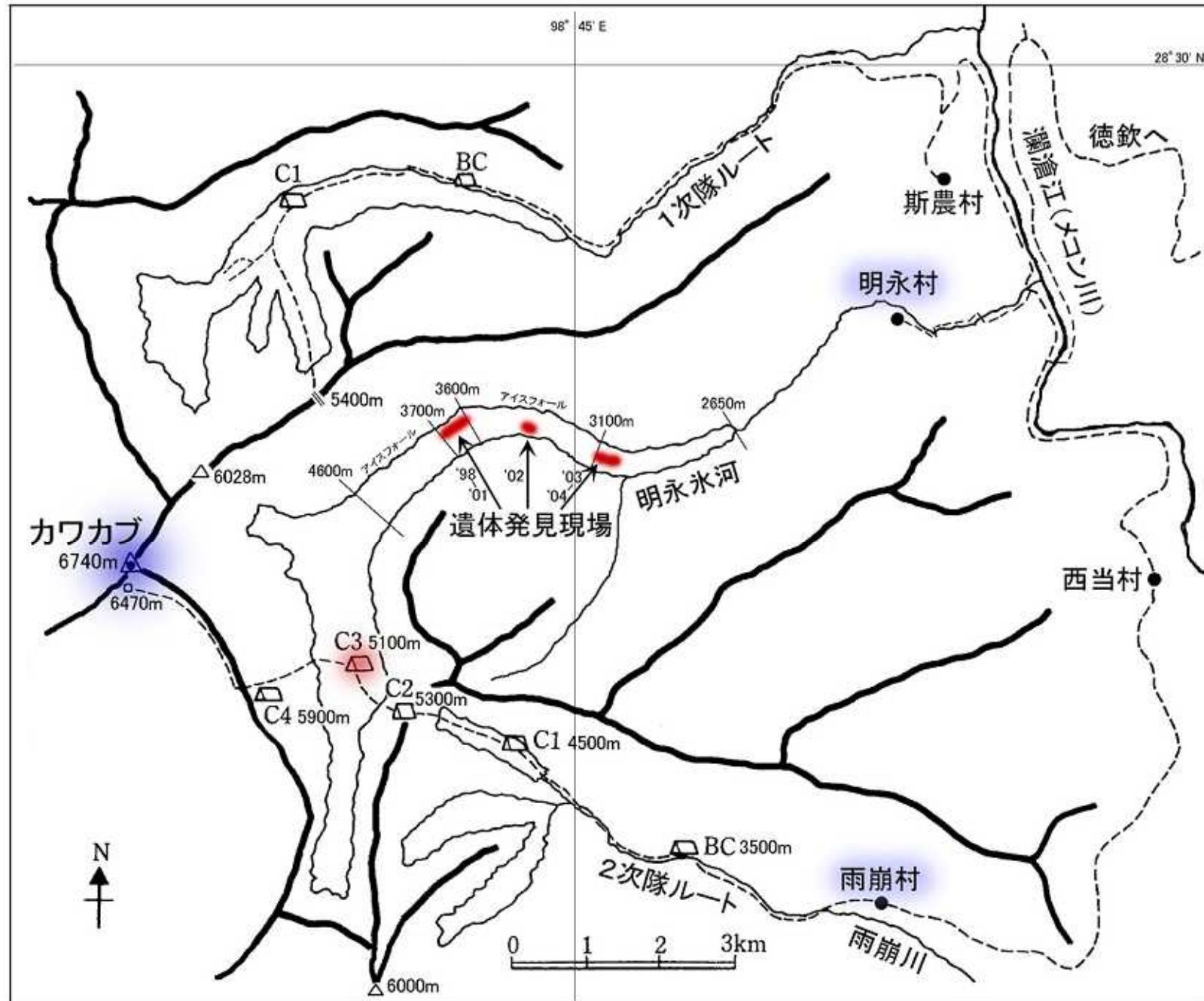
1998年(遭難から7年半後)

- 7月18日 明永村民が放牧中に、明永氷河3,700m地点で発見
(C3から水平4km、高度1,400m下流)
- 7月24日 中国側が現場確認
- 8月3・4日 日中合同隊が現場確認
10名分の遺体収容(5名の身元確認)、遺品20袋(約300kg)を回収
- 9月 8日 日中合同隊が現場確認、遺品5袋(約70kg)を回収
- 1999年
- 4月 6日 明永村民がキノコ採り中に、明永氷河3,700m地点で発見
- 7月～10月 10回の遺体搜索、7名の遺体を確認、約260kgの遺品を回収

確認遺体数と遺品・遺体収容重量(1998年～2010年)

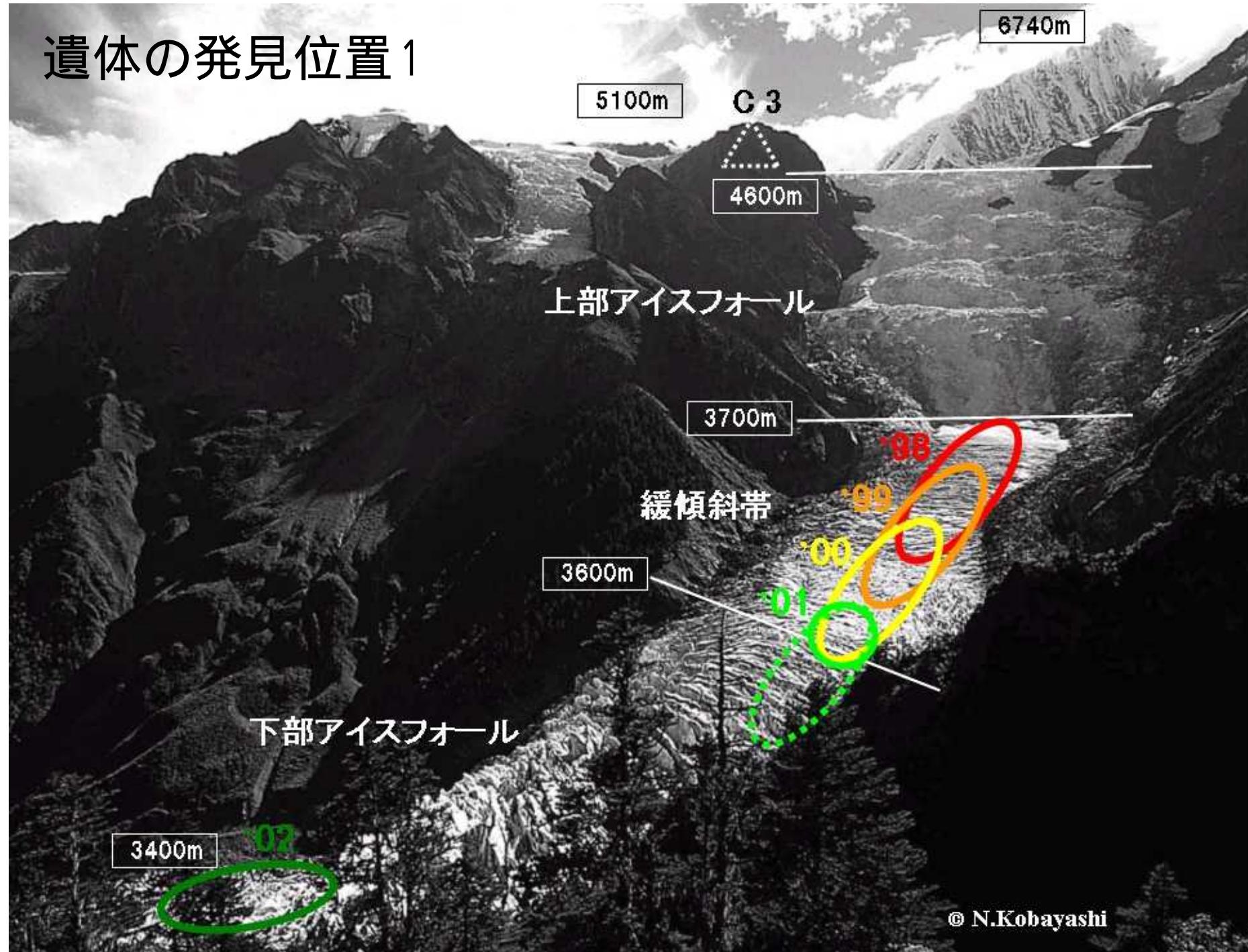
年	‘98	‘99	‘00	‘01	‘02	‘03	‘04	‘05	‘06	‘07	‘08	‘09	‘10	合計
搜索回数	2	10	5	5	4	4	4	6	5	6	4	4	3	62(回)
確認遺体(名)	5	7	2		1	1								16(名)
回収重量(kg)	370	260	120	70	30	250	40	10	10	10	10	10	5	1,195(kg)

遺体の確認数: 16名 (全17名中)

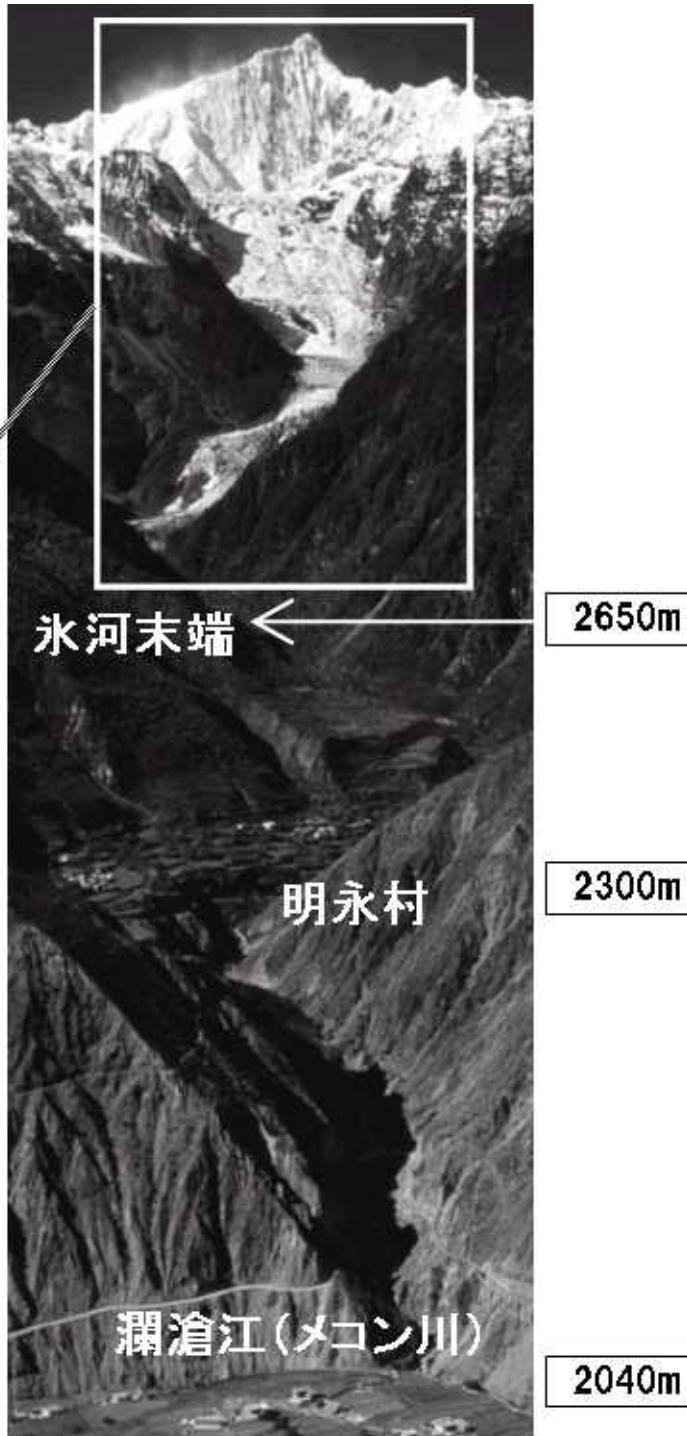
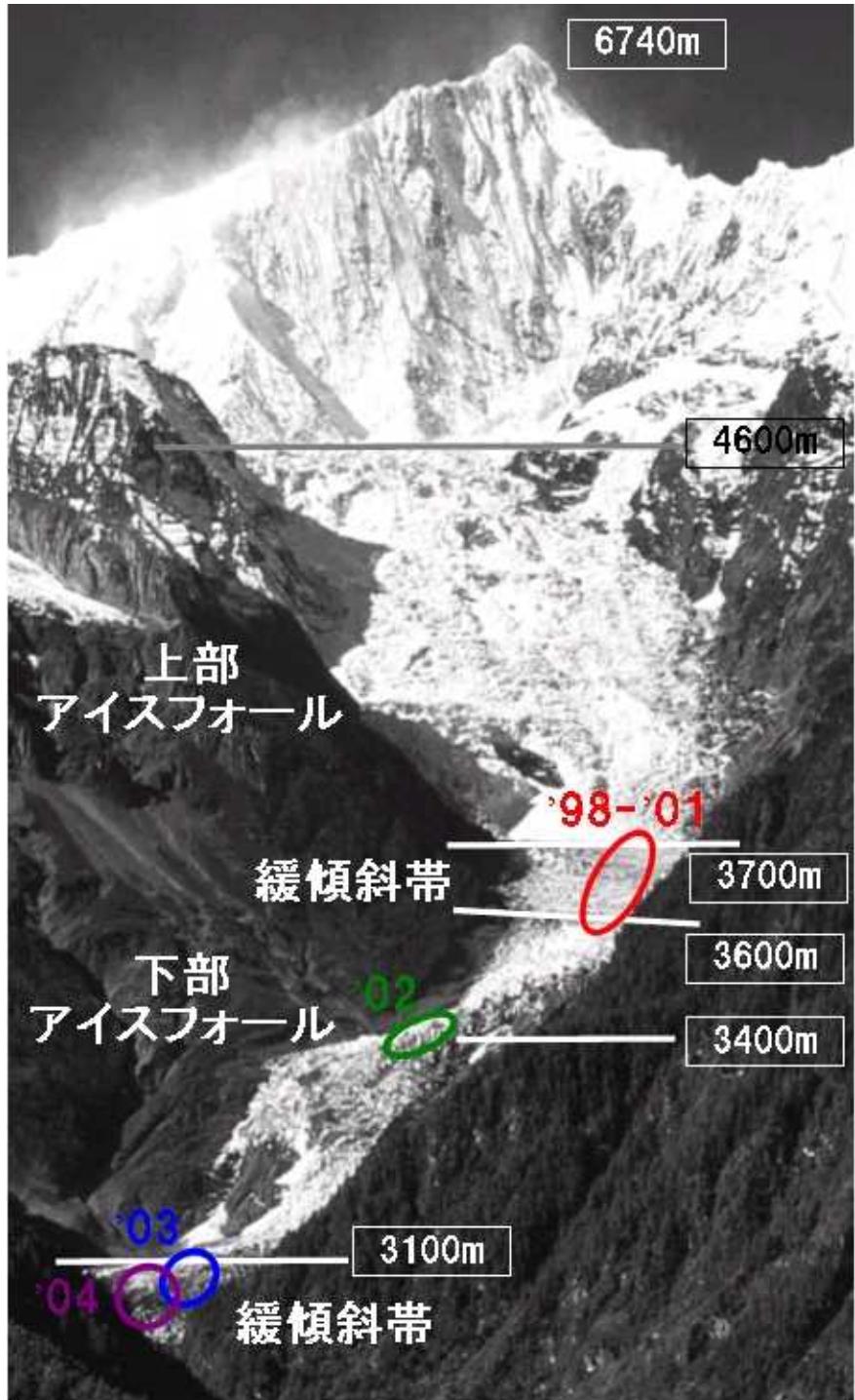


登山ルートと遺体発見現場

遺体の発見位置 1



遺体の発見位置 2



遺体の発見位置 3

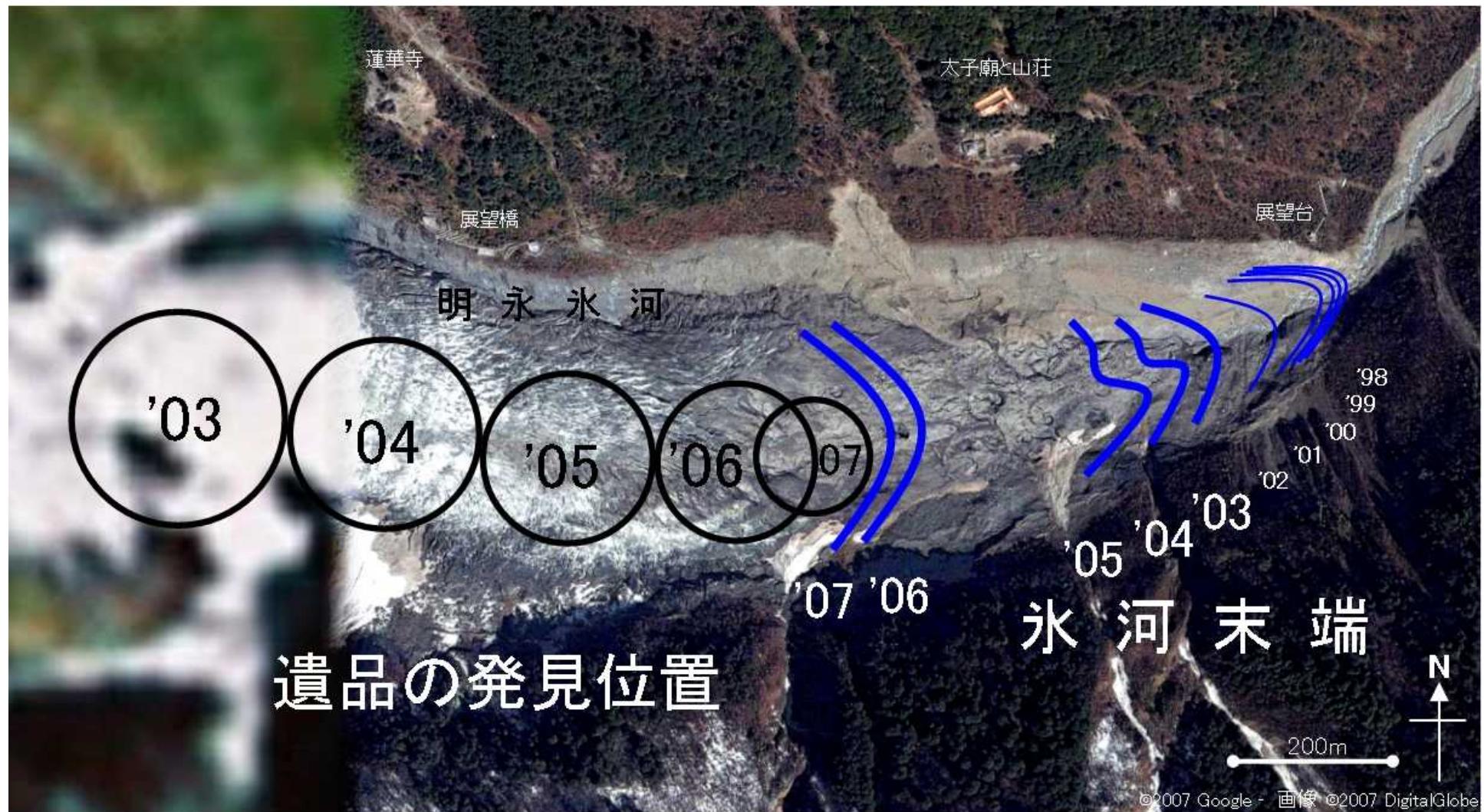


図. 遺品発見位置と氷河末端の移動(1998年～2007年) 衛星写真: Google Map



671 m
2004年12月8日 - 2008年10月30日

Image © 2011 TerraMetrics
Image © 2011 DigitalGlobe
Image © 2011 GeoEye
© 2011 Cnes/Spot Image

28° 27' 14.80" N 98° 44' 40.02" E 標高 3530 m

©2

遺体・遺品の収容量

遺体 - 胴体	15体	= 身元確認14体 + 身元未確認1体 (全17体の <u>88%</u>)	* 未収容2体
遺体 - 脚	26.5本	= 身元確認21.5本 + 身元未確認5本 (全34本の <u>78%</u>)	* 未収容7.5本
遺品	1,195kg	(全1,625kgの <u>74%</u>)	* 未収容430kg
日本人の手帳	12冊	(全冊数の <u>65%</u> 程度)	* 未収容5冊以上
遺品・遺体の全量の7～8割が収容された			* 未収容2～3割

DNA鑑定：

2回実施したが、DNAの損傷が激しく、鑑定が困難だった。
希望者の特定はできなかった。

遺体捜索に付隨して起きたこと

氷河(水源)汚染問題 (1998年)

遺品持ち出し (2000年、2004年)

村民による遺品売却 (2004年、2008年)

現地の(飛来寺)慰靈碑に傷 (2004年～)

聖山の問題

氷河縮小、降雨強化、鉄砲水 (2002年、2007年)

現地(明永村)に新たな記念碑建立 (2006年)

明永村村長の娘が日本留学 (2008年～)

聖山への登山について

梅里雪山 = 聖なるカワカブ チベット・カム地方の大聖山

山群を一周する巡礼路、数多くの聖地、

多い年には数十万人が巡礼に訪れる

「聖山とは親のようなもの」

「登山とは親の頭を踏みつける行為」

カワカブは生命の源、信仰の中心

登山対象が聖山か否か調査必要

信仰を集める山への登山は慎むべき









